

花のお江戸を歩く会

ビルの谷間に花のお江戸の名残を発見！！

「お江戸日本橋ぶらり散歩」

平成25年1月27日(日)

＜散歩コースガイド＞

日本橋は5つの街道の出発点で日本の中心です。川沿いに魚河岸、道沿いには大店や商家が建ち並び、まさに花のお江戸の中心街でした。

今もオフィス街や有名デパート、伝統の老舗などが並び日本の中心街として発展し続けていますが、かつては江戸の前島の埋立地の中心でした。今日は、そんな「味のある街」日本橋の街をぶらりと散策し、江戸の町づくりの核心に迫ります。

＜散歩コース順路＞

小伝馬町駅→十思公園→吉田松陰終焉の地→石町の時の鐘→大安楽寺→身延山別院→梶森神社→宝田恵比寿神社(べったらし縁)→お竹大日如来井戸跡→長崎屋跡(長崎奉行定宿→石町鐘楼堂跡→与謝野蕪村旧居跡→十軒店跡→日本銀行(金座跡)→貨幣資料館→常盤橋御門跡→一石橋→延命地蔵尊→(ランチ)江戸歌舞伎発祥の地→日本橋→魚市場跡→三浦按針屋敷跡→郵便局発祥の地→兜神社(兜町縁)→鎧の渡し跡→東京証券取引所→銀行発祥の地→山王日枝神社→智泉院→宝井其角住居跡→江戸秤座跡→安藤広重旧居跡→ヤンヨーステン記念碑→東京駅北口(北町奉行所跡)(解散)

＜個別ガイド＞

① 十思公園(じっしこうえん)

十思公園の入口には、「江戸三縁史跡」の説明板がたっています。三縁とは、「江戸伝馬町牢屋敷跡」「吉田松陰終焉之地」「石町の時の鐘」の史跡を表しています。

十思とは、明治初期の行政区画の第十四区の読み方に因んでいます。当地には、隣接している大安楽寺などを含めて2千6百坪余りの広さの牢屋敷がありました。牢屋敷は江戸初期までは常盤橋門外にありましたが、その後この伝馬町に移転してきました。ここには未決囚が多いときで900人余りが収監され、牢屋奉行の石出帯刀(※2)のもと、斬首刑が行われていました。斬首刑は、有名

な山田浅右衛門が同心に替わって行うことが多く、幕末では7代目山田浅右衛門が吉田松陰、頼三樹三郎、橋本左内らの首を斬りました。

■①-1 吉田松陰終焉の地

吉田松陰は安政元年にペリーが再来したときに渡航を画し失敗、伝馬町牢獄に収監され、安政6年に最後の時をここで迎え『身はたとひ武蔵の野辺にくちぬとも 留めおかまし 大和魂』ではじまる『留魂録』を死の前日に書き残しました。また、処刑が確定したときの『親思う心にまさる親心けふのおとずれ 何ときくらん』の辞世も有名です。※吉田松陰は安政6年10月27日に亡くなりました。数えて30歳、生涯不犯であったといえます。

■①-2 石町時の鐘（江戸で最初の時の鐘）

江戸で最初の時の鐘は、本石町3丁目（現在の本石町4丁目・室町4丁目の一部）に設置された石町の時の鐘であるといわれています。江戸市中に時刻を知らせた時の鐘は、市街地の拡大にともない、浅草・本所・上野・芝・市谷・目白・赤坂・四谷などにも設けられました。石町時の鐘は、鐘撞き役であった辻源七の書上によると、寛永3年（1626年）に本石町3丁目へ鐘楼堂を建てて鐘を撞いたことが記されており、鐘の音が聞こえる範囲の町からは「鐘楼銭」を集めて維持・運営が図られていました。本石町に設置された時の鐘は、何度か火災にあって破損したために修理や改鑄が行われました。現在の銅鐘には「寛永辛卯四月中浣 鑄物御大工 椎名伊豫藤原重休」の銘文が刻まれており、宝永8年（1711年）に鑄造されたことがわかります。「石町は江戸を寝せたり起こしたり」と川柳にも詠まれた石町時の鐘は、明治をむかえて廃止されましたが、昭和5年（1930年）に本石町から十思公園内に完成した鉄筋コンクリート造の鐘楼へ移設されて現在に至っています。

② 大安楽寺

このお寺は、この地にあった伝馬町処刑場で、露と消えた吉田松陰ら、勤皇の志士達の慰霊と牢獄跡の浄地をなすため、明治八年（1875）に建立された、比較的新しいお寺です。

③ 身延山別院（油かけ大黒天神）

希代の名優長谷川一夫は、生まれた京都伏見に油かけ町があったそうで、昔、油を売る商人が道端の石像に間違っって油をかけて以来、商売が大繁昌したという話が伝わっていたといえます。奥様のしげさんは、神仏に厚く帰依し、戦後間もなく「油かけ大黒天神」が夢に出て「東京に祀り、衆人と結縁せしめよ」との霊夢を見て、早速身延別院の住職藤井日静上人、後の身延山八十六世法主に相談しました。上人は膝を打って喜んだということです。

上人も幼少の時、大黒天神が槌をもって幼児を撃とうとする夢を見て、驚いて目覚めて、裏に逃げたところ、火災が起こる寸前の発火地点であったということで、それから

というものの火防の大黒天として祀ってきたということでした。そこで、長谷川一夫同しげ夫人が施主となり、身延山別院に油かけ大黒天神を祀ることにしたのです。祭日、甲子の日、殊に年末年始の甲子を大切に参詣すれば開運、安産、商売繁昌。福徳円満をもたらす、

④ 相森神社 (すぎのもり神社)

創建は約一千年前と伝えられ、天慶3年(940)には平将門追討を命じられた藤原秀郷が戦勝を祈願したと伝えられる。この時奉納した白銀の狐像が現存するという。文正元年(1466)、太田道灌が当社で雨乞いの祈願をなし、靈験あらたかであったことから、山城国伏見稻荷の五社の神を勧請し篤く敬った。

江戸時代には新橋の烏森神社、神田須田町の柳森神社とともに江戸三森と称され、大名から庶民まで広く信仰を集めた。寛文年間(1661~73)には吉川惟足が、御祭神・大己貴大神の託宣により恵比寿大神を奉斎した。

また、富興業も盛んで、三富に数えられたという(ただし、江戸三富というとは一般には湯島天神、目黒不動、谷中の天王寺とされる。落語『宿屋の富』では、湯島天神を舞台とするものと相森神社を舞台とするものがある)。境内にはこれを偲ぶ富塚があり、富札も残っている(いずれも中央区民文化財指定)。大正12年(1923)関東大震災で社殿が全焼。現在の社殿は昭和6年(1931)耐震構造の鉄筋造りで再建されたものである。→馬込勘解由屋敷跡

⑤ 宝田恵比寿神 (べったら市ゆかり)

宝田神社は慶長十一年(1606年)の昔四百十余年前、江戸城外宝田村の鎮守様でありました。徳川家康公が江戸城拡張により宝田、祝田、千代田の三ヶ村(現在皇居内楓山付近)の転居を命ぜられましたので、馬込勘解由(かげゆ)と云う人が宝田村の鎮守様を奉安申し上げ、住民を引卒して此の地に集団移転をしたのであります。馬込勘解由と云う人は家康公が入府の時、三河の国から随行して、此の大業を成し遂げられた功に依り、徳川家繁栄御祈念の恵比寿様を授け賜ったので、平穏守護の御神体として宝田神社に御安置申し上げたのが今日に至ったすです。作者は鎌倉時代の名匠運慶の作と伝えられます。

其の後 村民の生活は金銀為替、駅伝、水陸運輸、それぞれ重要な役を賜り、馬込勘解由は地主となって、三伝馬取締役に出世し、御役名に因んで大伝馬町の町名を賜り、家康ゆかりの諸国々より商人を呼び集めて、あらゆる物資の集散地として大江戸開発と商売発祥の地として大変賑わったのであります。宝田恵比寿神は商売繁昌、家族繁栄、火防の守護神として、崇敬者は広く関東一円に及び毎年十月十九日の「べったら市」が有名。

⑥ お竹大日如来井戸跡

寛永の頃(1640年頃)江戸大伝馬町佐久間家(一説に馬込家)の下女お竹は日頃より慈悲心が深く、ある日、羽前羽黒山の行者より大日如来の化身であると告

げられました。このことが市中に広がり、多くの人がお竹を拝むために訪れたといわれます。現在、芝の心光院に、お竹の木像や使った流し板、お竹大日如来に信仰の厚かった桂昌院(五代綱吉の母)の納めた蒔絵の手文庫などが保存されています。また、お竹が愛用し、貧困者が市をなしたという井戸の跡に碑が建てられています。赤羽台散歩の善徳寺にお竹さんと馬込家の墓があった。

⑦ 長崎屋跡 (長崎奉行定宿)

寛永18年(1641年)の鎖国完成後、長崎出島においてただ一国貿易を許されていたオランダは、そのお礼の意味で年一度献上品を携えて江戸に上り、将軍に拝謁することになっていました。その際、一行は、江戸では長崎屋源右衛門の長崎屋を定宿とし、100名以上も泊まったそうです。また、長崎屋にオランダ人が滞在している間に、幕府の天文方、医官、蘭学者などが訪問して学術的な質問をするなど、知識の交流の場としても大きな役割を果たしました。

⑧ 石町鐘樓堂跡

江戸で最初の時の鐘。①の説明と同じ。

⑨ 与謝野蕪村旧居跡 (夜半亭)

夜半亭は、元文2年(1737)俳諧師早野巴人(はやの・はじん=1676-1742)が「石町時の鐘」のほとりに結んだ庵です。「夜半ノ鐘声客船ニ至ル」という唐詩にちなみ、巴人も「夜半亭宋阿(そうあ)」と号しました。

この夜半亭には、多くの門弟が出入りしましたが、なかでも「宰町(さいちょう)」と号していた若き与謝蕪村(1716-1783)は内弟子として居住し、日本橋のこの地で俳諧の修行に励みました。

寛保2年(1742)巴人の没により、江戸の夜半亭一門は解散し、蕪村は江戸を離れて常総地方などを歴訪後、京都を永住の地と定めます。

やがて、俳諧師としての名声を高め、画業においても池大雅(いけのたいが)と並び称されるほどになった蕪村は、明和7年(1770)巴人の後継者に推されて京都で夜半亭二世を継承しました。

⑩ 十軒店跡

十軒店(じっけんだな)は雛市(ひないち)の立つ場所として知られていました。『寛永江戸図』に「十軒たな」と記された、石町二・三丁目と本町二・三丁目に挟まれた小さな町で、日本橋通りの両側に面していました。江戸時代の初め、桃の節句・端午(たんご)の節句に人形を売る仮の店が十軒あったことから、この名があるともいわれています。

⑪ 日本銀行(金座跡) * 明治時代は新川のIBMに日本銀行が創設された

現在、日本銀行となっている場所は江戸時代、金貨鑄造所の「金座」のあったところです。文禄4年(1595年)徳川家康が後藤光次(金工)を江戸に招いて小判鑄造を始めたのが金座の始まりです。金座は江戸時代を通じて、勘定奉行の

支配下にあつて、金貨(小判および一分金)の鑄造・鑑定・地金類の買収・監察などをしていたところで、江戸・駿河・佐渡・京都の4ヵ所に置かれていました。駿河は慶長年間に、佐渡は享保年間に廃され、京都金座も規模が小さくなって鑄造はほとんど江戸金座で行われていましたが、明治2年に廃止されました。
→貨幣博物館(小休息)

⑫ 常盤橋門跡

江戸城外濠の表正面で、現在は枳形門の石垣だけが残っています。この門は、浅草・千住を経て行く奥州街道の出口であったので、浅草口と呼ばれ、江戸五門のひとつにも数えられています。昭和3年国の史跡に指定されました。

→渋沢栄一銅像

⑬ 一石橋

北の金座後藤庄三郎と南に御用呉服商の後藤縫殿助の屋敷があつたことから後藤(五斗と五斗)で一石橋となつたそうで、江戸で最もにぎやかな場所であつたため、迷子探しでも有名な橋でした。

⑭ 延命地藏尊(花柳章太郎ゆかり)

花柳章太郎が板絵 お千世の図額を奉納した地藏尊。花柳章太郎は、戦前、戦後の新派を代表する女形役者で文化功労者となっている。当時まだ無名であつた花柳章太郎が日本橋の花街を舞台とした日本芸者物語のお千代役を熱望、西河岸地藏堂に祈願し起用された。このお千代役が出世作となつた。また、谷崎潤一郎が幼少時代にばあやに連れてこられたとの話もある。

⑮ 日本橋(日本国道元標)

橋の中心に日本国道路元標が埋め込まれており、国道1号のほか主要国道の起点となっている。古くは五街道の起点であり、昔も今も日本の交通網の中心である。現在の橋は第19代目で、1911年(明治44年)に架けられた石造の二連アーチ橋である。1999年(平成11年)に国の重要文化財に指定され、日本三名橋にも数えられる美しい橋であるが、直上を通過する首都高速道路都心環状線に覆われてしまつているため、「悪い景観百景」にも挙げられてしまつている。この状況に周辺住民らが、首都高速道路を地下に移して景観を復活させる構想を立てているが、事業費の問題から賛否両論がある。

⑯ 日本橋魚市場発祥の地碑

江戸～大正までの期間、このあたりから北(三越の東側一帯)にかけて大きな魚市場が広がっていた。碑文はくずし字で書かれ、おまけに古くなつているため大変読みにくいだが、その内容はおおよそ次のようなものである。昔から東京湾でとれる魚を売りさばくために、日本橋に魚河岸ができていた。この頃の市場は漁民が自分で商っていた。徳川家康が江戸に幕府を開いた際、摂津の佃村・大和田村から数十名の漁民を江戸に移り住ませて江戸城で消費

する魚をとらせた。幕府に納めた残りの魚を一般に販売するために、魚をとる人と商う人が分離されて、本格的な魚市場になり、諸国からの海産物も入荷するようになって大いに賑わった。この魚河岸は明治・大正時代まで300年余り続いたが、関東大震災により魚市場は築地に移転を余儀なくされた。

⑰ 三浦按針屋敷跡（徳川幕府の相談役）

オランダ東印度会社東洋派遣隊の航海士であった英人ウィリアム・アダムスは、慶長5年(1600年)暴風のため大分県の佐志生に漂着しました。のち、家康の通商顧問になり、日英貿易の発展に貢献しました。現在、室町1丁目地内にある按針居住の地は、昭和5年6月、東京府史跡の指定を受け、同7月、地元有志の手で記念碑が建てられましたが、戦災で破壊され、昭和26年5月に現在の記念碑が建てられました。

⑱ 名水白木屋の井戸

日本橋交差点角にあった東急百貨店(平成6年1月閉店)は、昭和33年まで白木屋という屋号でした。白木屋は、近江商人大村彦太郎の創業、越後屋と肩を並べる呉服の店で、二代目彦太郎が正徳2年(1712年)に掘った井戸の水は、付近の住民のみならず、広く「白木名水」とうたわれました。現在、白木名水は消失しましたが、東京都指定の旧跡として記念碑があります。

⑲ 郵便局発祥の地

日本の近代的な郵便制度は、明治4年(1871年)前島密の創意により、まず、東京-大阪間で始まりました。ここは新制度発足当時、駅通司(今の郵政省)と東京の郵便役所(今の中央郵便局)が置かれたところで、昭和37年、前島密の胸像と記念碑が建てられました。

⑳ 兜神社(兜町ゆかり)

東京証券取引所本館の北、道路を挟んで日本橋川の辺に小さな神社があります(日本橋兜町1-8)。これが証券界の守り神とされる兜神社です。神社の御祭神は、主が商業の守護神の「倉稲魂命(うかのみたまのみこと=御稻荷さんの別名)」で、合祀されている神様は、大国主命(大黒様)と事代主命(恵比寿様)です。

21 鎧の渡し跡

日本橋川には鎧橋という橋が架かっていますが、この橋の地が、源頼義が奥州攻めにあたり、にわか暴風雨に渡れず着用鎧を投げ龍神に祈ってようやく渡ることのできたと伝えられる場所です。その後、長く鎧の渡しとして人々に利用されました。

22 銀行発祥の地

明治6年、前年に制定された「国立銀行条例」に基づき、日本最初の銀行である「第一国立銀行」がここに創立されました。当時の建物は、三井組が建てた「三井組為替方」を譲り受けたもので、海運橋のたもとにそそり立つ壮麗な

和洋折衷建築として有名だったそうです。（「三井組ハウス」と呼ばれていたそうです。）

もともと、現在はみずほ銀行兜町支店の外壁に「わが国銀行発祥の地」という銘板がはめ込まれているだけになってしまっています。なお、当時、第一国立銀行頭取であった渋沢栄一邸は、この第一国立銀行の構内ともいふべきところにあったそうです(明治9年に転居)。→山王日枝神社

23 智泉院

智泉院は「茅場町薬師」の名で広く知られた名刹で、縁日には植木市も開かれ、江戸庶民の厚い信仰を集めていました。瑠璃殿前の天水鉢は、天保12年(1841年)に本尊が開帳されたのを記念し、奉納されたもので、銘には当時の坂本(現、兜町)という町名や、町に住んでいた人々の名が刻まれています。鑄出した釜屋七右衛門は、通称釜七とあって、江戸では有名な鑄物師でした。この天水鉢は、当時の賑わいを現在に伝えるものとして、中央区民文化財に登録されています。

24 宝井其角住居跡

蕉門十哲の一人宝井其角(1661年～1707年)は近江の生まれです。江戸に来て蕉門に入り、芭蕉の没後、派手な句風で洒落風を起し、その一派は江戸座と呼ばれました。代表作に、「錦とりてねびまさりけり雛の顔」「越後屋にきぬさく音や更衣」「日の春をさすがに鶴の歩みかな」花のお江戸で歩いた、墨田川沿いの三囲神社の「雨乞いの句」を思い出しませんか。江戸はつながっていますね。それが楽しい・・・

25 安藤広重住居跡

浮世絵師歌川広重「安藤広重」(1797～1858)が、嘉永二年(1849)から死去までのおよそ十年間を過ごした住居跡です。広重は、幕府の定火消組同心安藤源左衛門の長男として、八重洲河岸(現在の千代田区丸の内二丁目)の火消屋敷で生まれました。

十三歳のとき父母を失い、父同様定火消同心になりましたが、文化八年(1811)十五歳のとき歌川豊広の門人となり、翌年には広重の号を与えられ、歌川を称することを許されました。特に、晩年に描いた「名所江戸百景」は、当時大鋸町(京橋)と呼ばれていたこの地での代表作です。住居は、幕府の奥絵師(御用絵師)狩野四家のうち、中橋狩野家屋敷の隣にあり、二階建ての独立家屋であったといわれます。広重の墓は足立区伊興寺町散歩の東岳寺にありましたね。

26 ヤンヨーステン記念碑

ヤン・ヨーステンは、徳川家康の外交顧問に登用されたオランダ人で、この辺りに住んでいたそうです。住んでいた場所は、略して「ヤヨス河岸」と呼ばれ、それが後に今の地名「八重洲」になったとか。→北町奉行所(解散)

②7